

親元に同居する成人未婚者の親子関係

第一生命保険相互会社（社長 森田富治郎）のシンクタンク、ライフデザイン研究所（所長 千葉商科大学学長 加藤寛）では、両親と同居する全国の20～39歳の未婚男女599名を対象に標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

このほど、その結果がまとまりましたので、ご報告いたします。

目次

アンケート調査の実施概要	1
【親に生活費を入れているか】	2
【生活費に関する親の態度】	3
【帰宅が遅くなった場合の親の対応】	4
【帰宅が遅くなった場合の親の干渉】	5
【親元を離れて生活したいか】	6
【親元を離れたい理由】	7
【親元を離れない理由】	8
【親元生活のデメリット】	9
【研究員のコメント】	10

*この冊子は、当研究所発行の調査月報、「LDI REPORT」の7月号の要約です。「LDI REPORT」を7月号ご希望の方は、右記の広報担当までご連絡ください。

お問い合わせ

株式会社ライフデザイン研究所
業務推進部広報担当 / 福原・岸

〒100-0006

東京都千代田区有楽町 1-13-1

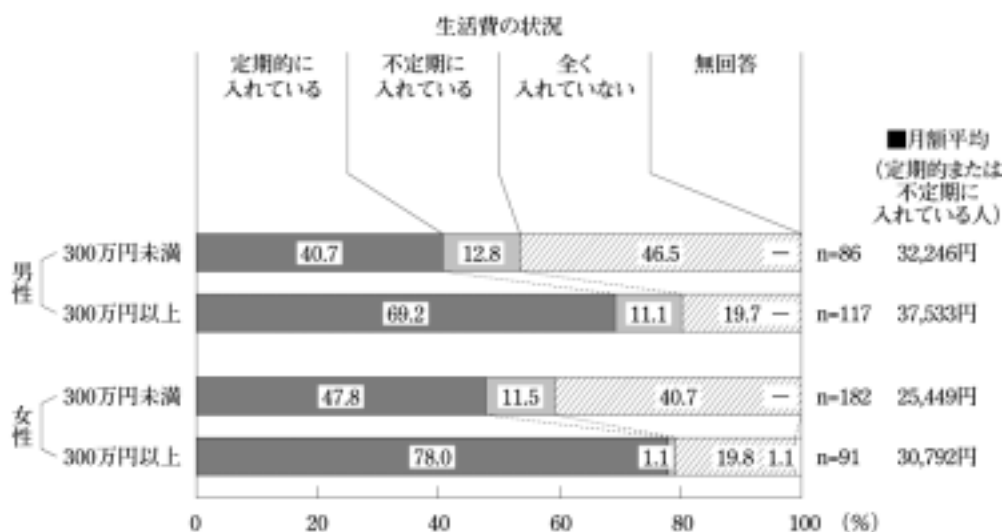
TEL . 03 - 5221 - 4772

FAX . 03 - 3212 - 4470

親に生活費を入れているか

親に生活費を入れている割合は約7割である。
 年収300万円を境に生活費を入れている割合に差がみられる。

図表1 生活費の状況と月額平均（年収別）



(単位：%)

	定期的に入れている	不定期に入れている	全く入っていない	無回答	n	月額平均 (円)
男性全体	57.5	11.6	30.9	0.0	207	35,760
女性全体	58.1	8.3	33.2	0.4	277	27,732

親との経済的関係について、親に生活費を入れているかについて質問してみました（図表1）。

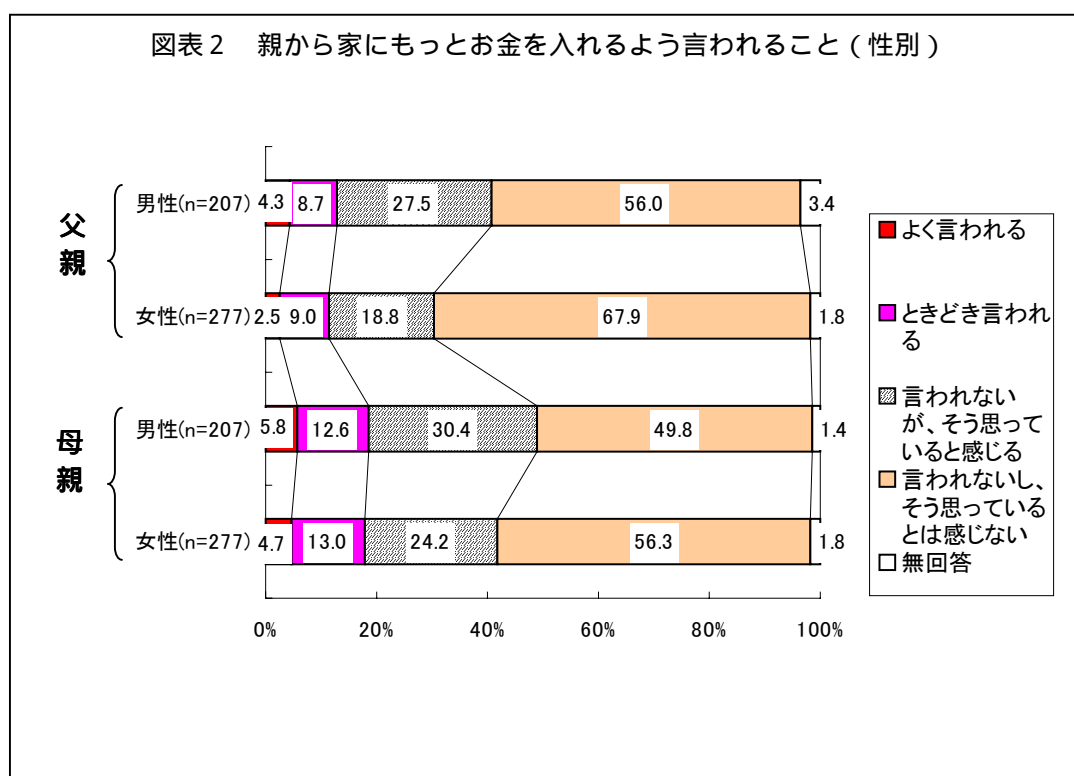
その結果、回答者の6割弱が生活費を「定期的に入れている」と答え、「不定期に入れている」と答えた者を合わせると、約7割が生活費を入れています。

生活費の状況に関しては、年齢や職業、親の暮らし向きなどの属性よりも、本人の年収との関連が強いと考えられます。年収300万円以上の者では7～8割程度が定期的に生活費を入れているのに対し、年収300万円未満の者では、定期的に生活費を入れている者が半数以上を占めています。

なお、生活費を入れている人については、男性の平均月額が**35,760円**、女性が**27,732円**となりました。平均月額に関しても、年収300万円未満と年収300万円以上の人では、男女とも5,000円以上の差がみられます。

生活費に関する親の態度

男女の約5～7割弱は生活費について、親からの圧力を感じていない。
 “家にもっとお金を入れるように”と直接言われた経験を持つ者は、男性・女性ともに1～2割にすぎない。



子が入れる生活費について、親はどのような態度でいるのかを調査しました(図表2)。この結果、男女とも約5割から7割弱は、生活費に関する親からのプレッシャーを全く感じていないことがわかりました。

男性では3割前後、女性では2割前後が間接的なプレッシャーを感じてはいるものの、直接言われた経験をもつ者は全体のごくわずかです。生活費に関する親の態度は、子が実際に生活費を入れているかどうかにかかわらず、あまり変わっていません。

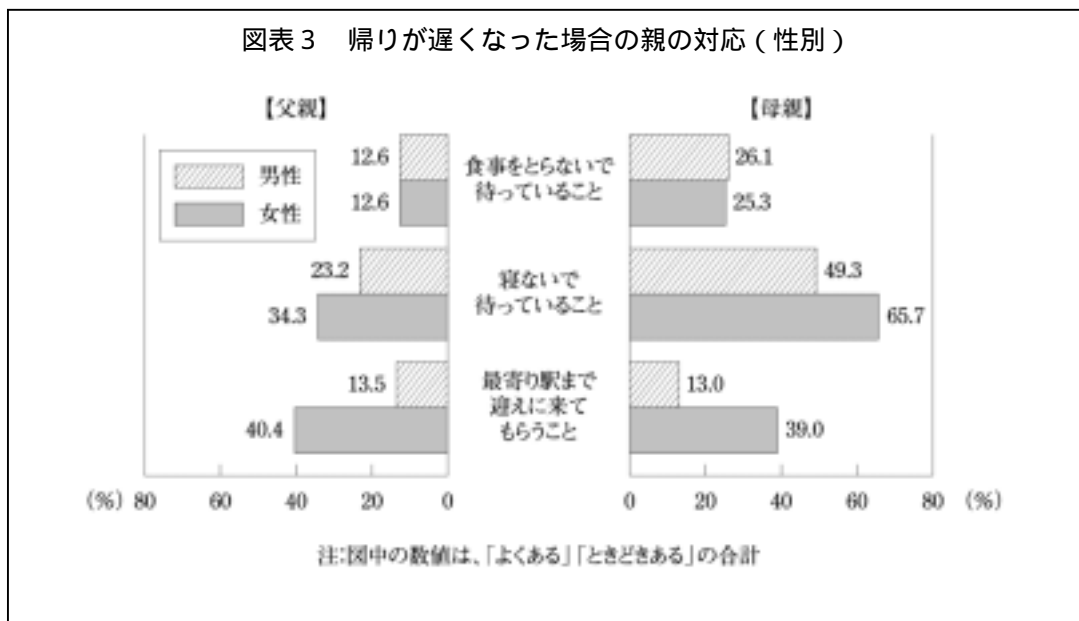
生活費を全く入れていない者でも、負担するよう親から直接言われている者は少数派となっています(父親から；男性：9.4%、女性：11.0%、母親から；男性：17.2%、女性：23.9%)。

成人未婚者は、生活費の負担という点で、親からの圧力をあまり受けていないと考えられます。

帰宅が遅くなった場合の親の対応

親が“ 駅まで迎えに来る ” “ 寝ないで待っている ” という経験を持つ女性の割合は男性より高い。

“ 母親が寝ないで待っている ” と答えた女性の割合は7割近くに達する。



帰宅が遅くなった場合、親はどのように対応しているかを調査しました（図表3）。

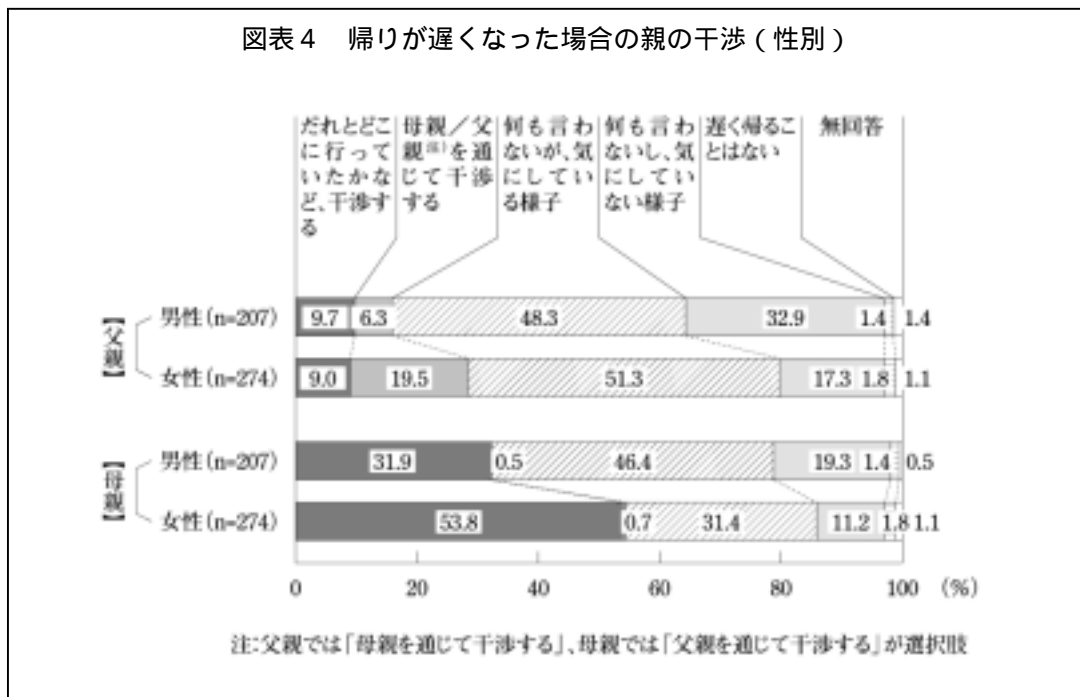
この結果、“ 寝ないで待っていること ”、“ 最寄り駅まで迎えに来てもらうこと ” の2項目に関しては、父親、母親の双方とも、女性は男性よりはるかに経験者が多くなっていることがわかりました。

女性のうち、帰りが遅くなった場合に母親が寝ないで待っていることがあるとの回答が65.7%にも達しました。

女性の場合、父母に最寄り駅まで迎えに来てもらうことがある人も多く、迎えや就寝時間の変更による親側の負担も少なくないと考えられます。安全性などの面で、息子より娘に対する心配の方が強いと推測される一方で、娘の帰宅時間によって親の生活時間が左右されている様子もうかがえます。

帰宅が遅くなった場合の親の干渉

女性は、父母ともから干渉を感じるとの回答が男性より多い。
父親は間接的に、母親は直接的に干渉する傾向がある。



帰りが遅くなった場合、親は干渉するかについて聞いてみたところ、男女の差が著しい結果となりました（図表4）。

女性のうち、干渉を受けていると感じている割合は、父親からが28.5%、母親からが54.5%に達し、男性と比べ高い結果となりました。

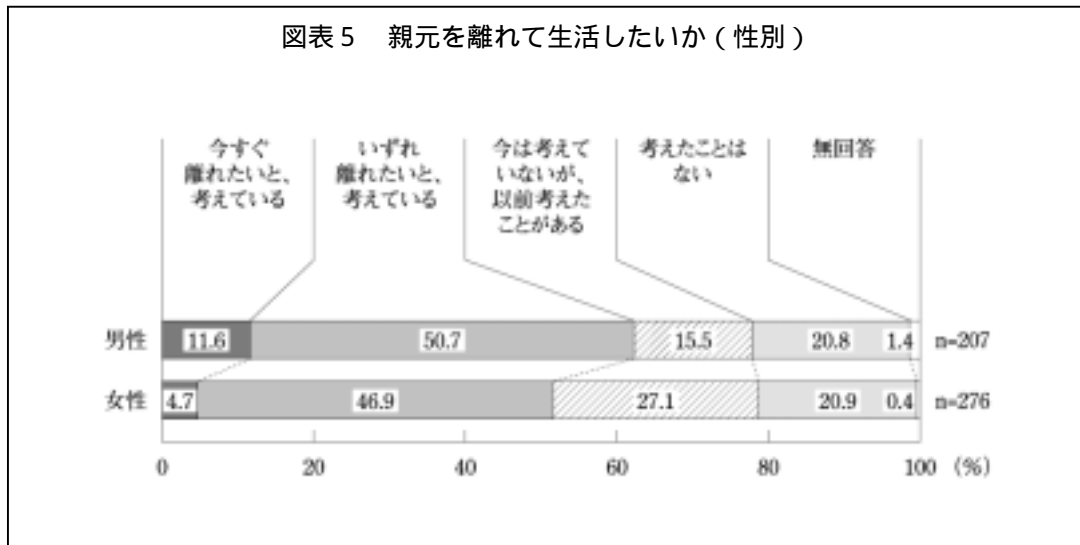
また、母親では父親に比べて子の行動に対する関心が高く、細かくたずねる傾向が強いと考えられます。これらの傾向をみると、母親の場合、精神面では子側よりもむしろ親側の方が子離れできていないのではないかと考えられます。

直接的な干渉については、父親では母親に比べて著しく少ない結果となった一方、間接的な干渉に関しては、男女とも母親より父親から感じている人が多くなっています。特に、女性の場合、約2割は父親が「母親を通じて干渉する」と答えており、「何も言わないが、気にしている様子」と合わせると、父親からの間接的な干渉を感じている者は7割以上を占めています。

母親と父親では、子どもとの接触の仕方が大きく異なっている様子がうかがえます。

親元を離れて生活したいか

親元から離れて生活したいと「考えている」、または「考えたことがある」と回答した割合は、男女ともに8割近くにも達する。

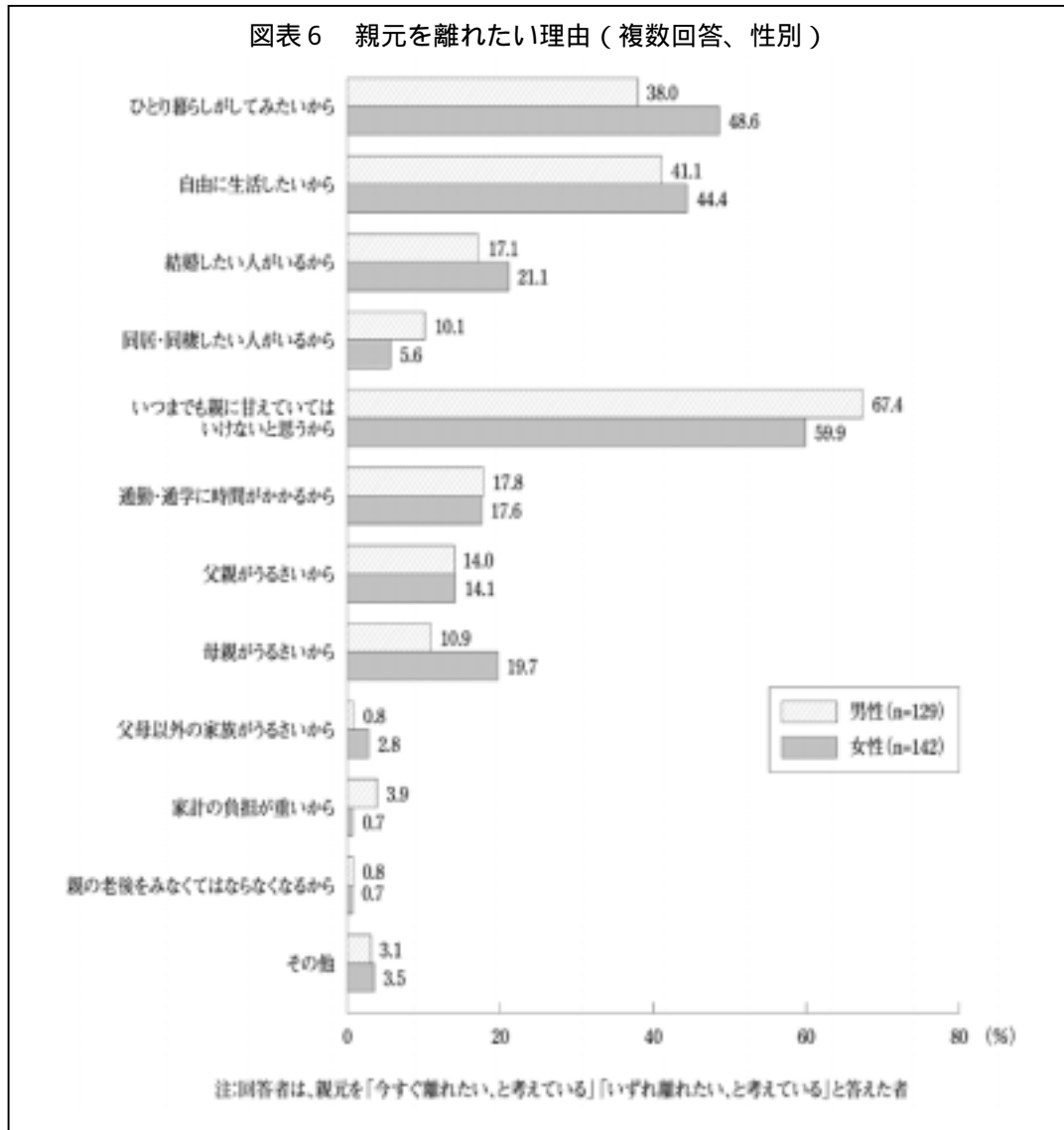


親元で生活する成人未婚者たちは、親元から離れることについて、どのように考えているのでしょうか。親元からの独立の意向を尋ねてみました（図表5）。男女とも「いずれ離れたいと、考えている」と答えた者が最も多く、半数前後を占めています。

「今すぐ離れたいと、考えている」「いずれ離れたいと、考えている」「今は考えていないが、以前考えたことがある」を合わせると、その割合は男女とも約8割となり、大半は親元から独立を考えているか、考えた経験をもつことがわかりました。

親元を離れたい理由

「親への甘えに対する自制心」「ひとり暮らしへの関心」「自由な生活への欲求」が3大理由である。



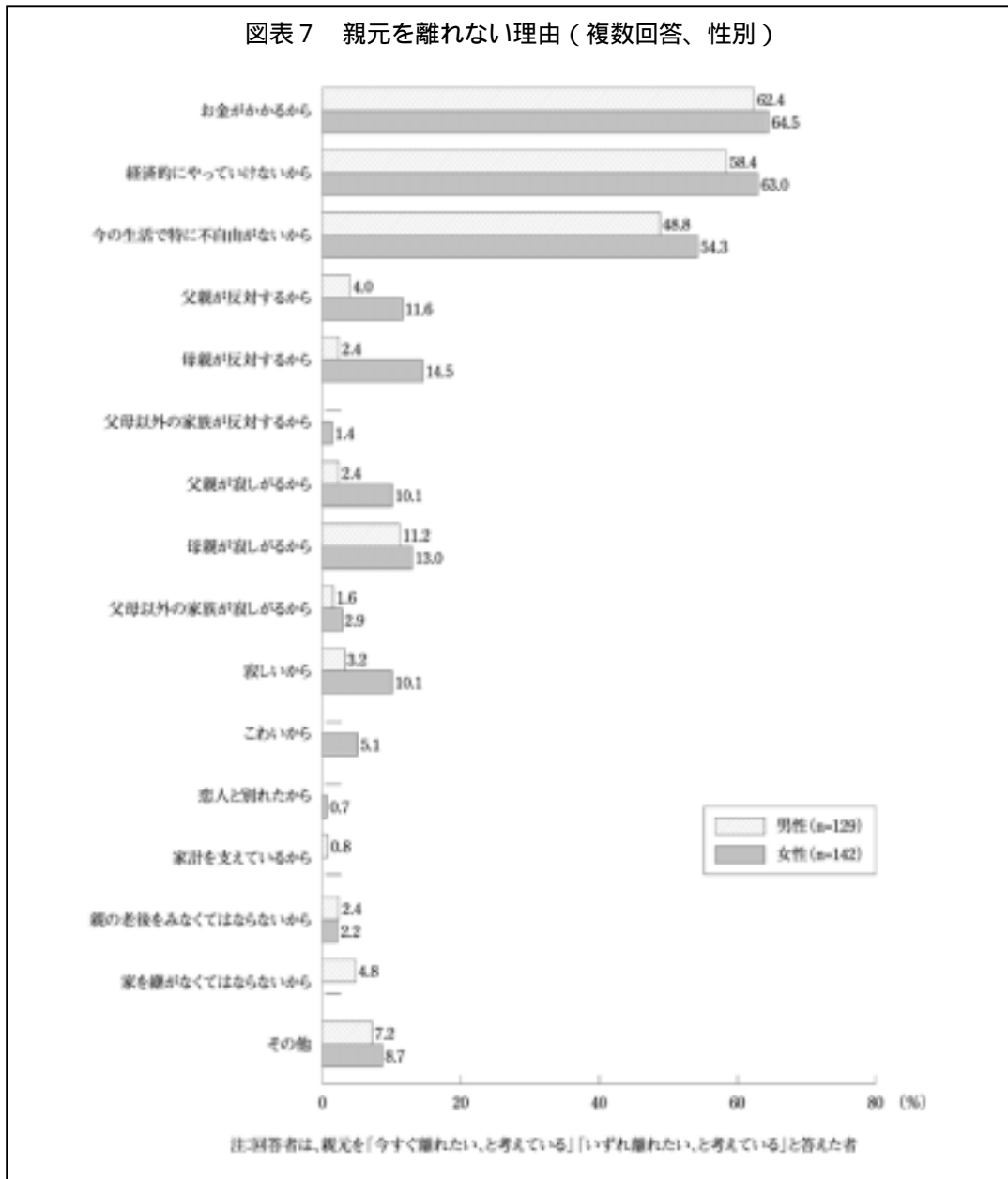
現在、または将来、親元からの独立の意向をもっている者に、その理由を複数回答で質問してみました（図表6）。

その結果、男女に共通して最も多くあげられた項目は、「いつまでも親に甘えていてはいけないと思うから」であり、男性では67.4%、女性では59.9%を占めました。

これに加えて「ひとり暮らしがしてみたいから」と「自由に生活したいから」の2項目も、男女に共通して全体の3分の1以上が支持しています。これら3項目の支持率は、他の項目を圧倒しており、親への甘えに対する自制心、ひとり暮らしへの関心、自由な生活への欲求は、親元に同居する成人未婚者が“親元を離れたい”と思う3大動機と考えられます。

親元を離れない理由

経済的基盤の脆弱さ・現状の生活への満足感が、親元からの独立を妨げる。親の反対や親への気遣いなどをあげる回答は少数である。



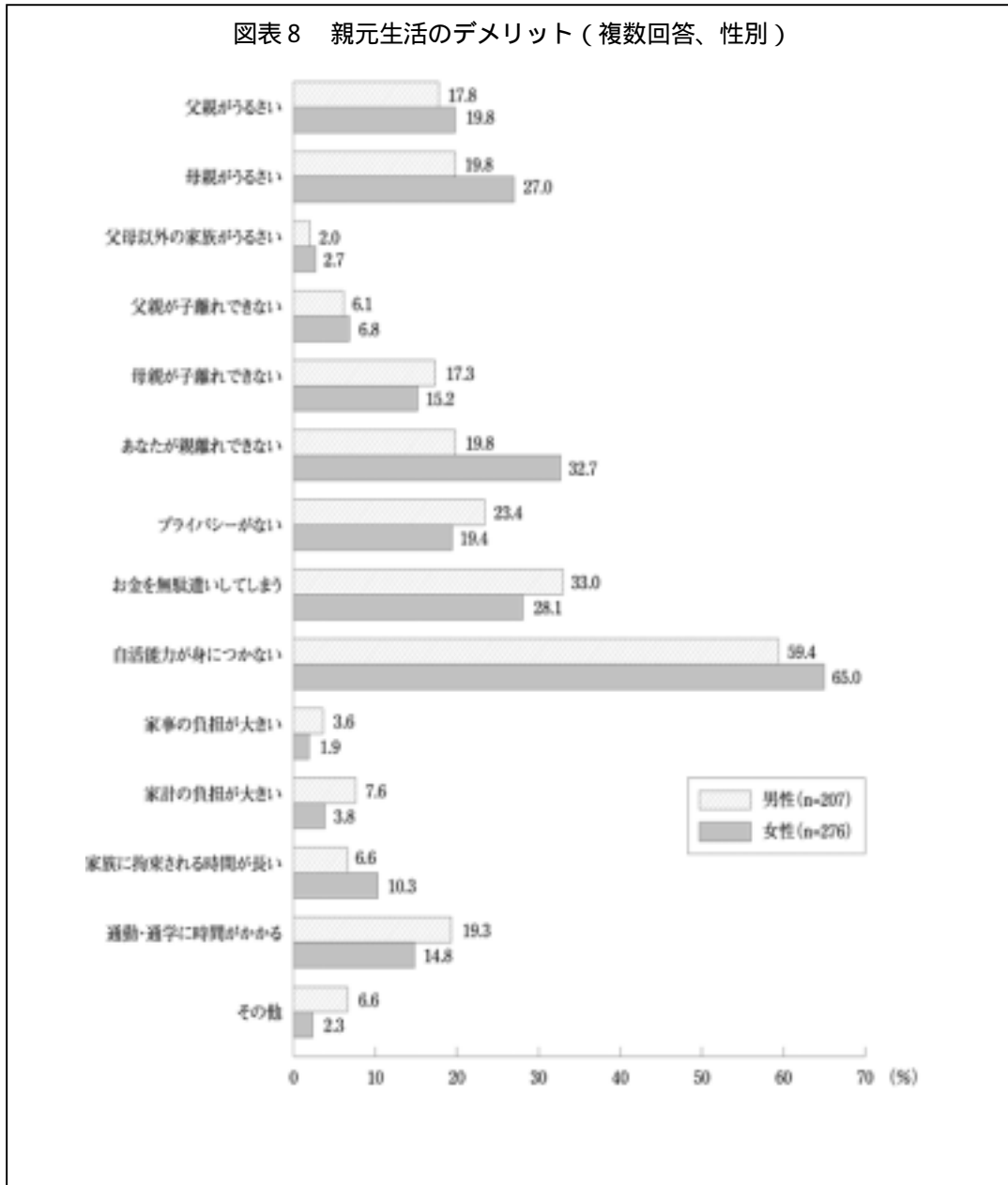
独立の意向をもつ者が、意向をもちながらも親元にとどまっている理由について質問してみました。この結果、「お金がかかるから」「経済的にやっていけないから」「今の生活に特に不自由がないから」の3項目が他を圧倒して多くあげられました（図表7）。

何よりも、生活の経済的基盤が大きな壁となっていると考えられます。また今の生活に一定の満足感を得ていることも、独立を躊躇する理由になっているようです。

一方、「父親/母親が反対・寂しがる」などの理由は、いずれも女性の1割強があげているものの、少数です。

親元生活のデメリット

「自活能力が身につかない」との回答が圧倒的に多い。



親元に同居する今の生活におけるデメリットについて調査してみました（図表8）。

この結果、「自活能力が身につかないこと」をあげた人の割合は、他の項目に比べて突出して多く、次いで、「お金を無駄遣いしてしまう」（男性が33.0%、女性が28.1%）があげられました。

本人たちは、生活設計意識の希薄さや自活能力への危機感をかなり厳しく感じ取っていると考えられます。

研究員のコメント

若者の晩婚化が進んでいます。総務省が6月に発表した2000年の国勢調査抽出速報によれば、20代後半の未婚率は男女とも5割を超えました(男性:69.5%、女性:54.0%)。いまや30代前半においても、男性の5人に2人、女性の4人に1人が未婚者です。

若者の晩婚化現象に関連して、親と同居する若者の存在が注目されています。「パラサイト・シングル」という言葉も話題となり、家事や経済の面で親に依存していると、彼らのライフスタイルを批判的にとらえる議論が多く展開されました。2001年1月に行われた世論調査で、「親と同居しながら、経済面や家事を親に頼る若者が増加していることについてどう思うか」という設問に、75.3%の人が「支持できない」と答えたとの報道もあります(2001年2月16日付読売新聞)。

しかし、イギリスの社会学者G・ジョーンズが指摘するように、若者が親元にいることだけをもって、若者が親に依存しているととらえる見方は必ずしも適切ではありません。若者の多くが親元にとどまっているという現象の背景には、本人の意識だけでなく、親側の姿勢や、独立生活を支えうるだけの雇用や収入などの安定した経済基盤、住宅面などの社会的受皿などの問題が関連していると考えられます。すなわち、同居が必ずしも若者の主体的選択であるとは言いきれない側面にも目をむける必要があるのです。

当社では、親元に同居する若者にアンケート調査を実施し、離家(独立)への意向や、親との同居生活の実態についてたずねました。その結果、親と同居している若者の半数近くは独立する意向をもっているものの、経済面での不安を強く感じていることが明らかになりました。独立生活の実現可能性に対する意識には収入によって大きな違いがみられ、必ずしもすべての若者が選択的に親元にとどまっているのではない可能性も示唆されました。また、同居する子に対する親の態度には、男女で大きな違いがみられ、女性では親との間で帰宅時間などに関するルールが設けられている人が多く、親の心配や干渉も強い傾向にありました。

このように、若者の離家(独立)をめぐるのは、若者や親世代がおかれている社会的状況、独立に対する親や本人の規範意識、これらの男女差や経済階層による違いなどに留意して議論する必要があります。また、親からの自立は、親元から独立したり、結婚すれば達成されるというものではありません。単独世帯の若者と親との交流実態や援助関係、若年既婚者と親との関係なども視野に入れた上で検討していく必要があるでしょう。

(研究員、北村安樹子)